

# 学級づくり 私の「はじめの一步」

春日井学力研 堀井 克也

## 一日一日を、本当に大切にしたい

この度の一斉休校があつたことで、今年度のスタートをこれまでとはかなり違った思いで迎えています。

それは、「子どもたちが学校へ通ってくること、毎日授業ができることは当たり前ではない」と知つたからです。本来ならば子どもたちと過ごせたはずの十五日間、「みんなに会いたいなあ。」「授業がしたいなあ。」と、そればかりを考えながら過ごしました。一年間で約二百日、という大前提が崩れる経験をしたことで、だからこそ一日一日をもっと大切にしていかなければならないと考えるようになりました。

となれば、四月に良いスタートを切ることは、これまで以上に重要な意味をもつこととなります。自分なりに意識していることは色々ありますが、ポイントをしばつて整理してみたいと思います。

## 凍々しい雰囲気への第一歩

新しいクラスをうけてもって、子どもたちの前に立つと、キラキラした目でこちらを見ている子どももちろんいますが、背中を曲げ、何となくだらけた雰囲気の子が結構います。こういう子たちを放っておくと、クラス全体の雰囲気がだらけてしまいます。

そこで私は「声を出させること」と「行動のスピードを上げること」の二点を意識して、指導に当たります。

声については、「あいさつ」と「返事」にしばつて意識させ、自分が元気な声であいさつしたり話したりするとともに、よく声の出ている子を褒めます。これまで大きな声を出す経験の無かった子もいますので、声の小さい子を叱ったり責めたりしてはいけません。ただ、少しでも伸びが見られたら、ここぞとばかりに大きさに褒めます。

次にスピードについてです。例えば国語

の授業開きで「教科書の〇ページを開きましょう。」と指示をすると、サツと開く子もいれば、指示されてから教科書を探し始める子もいます。そこで、一旦ストップさせて、再度教科書を閉じて机上に置かせ、「サツと開いてみようか。」と声を掛けてからやり直します。出来たら褒めます。出来なければもう一度……こうしたやり直しを、他にも起立する際や、廊下に並ぶ際などに繰り返していきます。ここでも、叱ったり責めたりはしません。みんなが出来ることを求め、淡々と、出来るまで繰り返させます。すると、サツと行動することが当たり前になってきて、クラスの雰囲気が凍々しいものへと変わっていきます。

さて、このように、声を出させたり、行動のスピードを上げさせたりしていると、「軍隊みたいだ」と仰有る方が時々います。しかし、そのご意見には承服しかねません。というのも、目的が異なるからです。実は子どもたちは、ガラガラとした雰囲気よりも凍々しい雰囲気を好みます。サツと行動することの心地よさに気付くと、言われなくても素早く行動するようになります。子

どもは心地よさの中でこそ思いっきり伸びていくものです。ですので、子どもたちの前に立つ私も、鬼軍曹のような厳しい表情ではなく、いつも笑顔を心掛けています。

## 子どもとつながる第一歩

さて、クラス全体の雰囲気づくりと並行して取り組まないといけないのが、子ども一人ひとりとの関係づくりです。

というのも、四月の段階では（特に低学年では）、子ども同士を結びつけることよりも、教師と子どもとがしっかりとした信頼関係でつながることが大切だからです。

「この先生は信用できる人だ。」「この先生とだったら自分は一年間で成長できそうだ。」と感じさせることが重要です。

その手だてとして、以前から学級通信を活用してきました。一人ひとりの具体的な姿を写真とともに載せ、価値づけていくのです。出来るだけ色々な子が出てくること、子どもが目を向けにくいようなことに着目することなどを意識して書きます。

ですが、これだけでは不十分に感じて、書き始めたのが「子どもへの手紙」です。私が見つけたその子の良い姿を具体的に認

めるとともに、今後の成長に対する期待を綴って、机の中にこっそり入れておきます。

クラスで最初に先生からの手紙をもらった子の反応を見るのが毎年楽しいのですが、昨年度の二年生の場合、「え…何これ。あ！先生からのお手紙だ！」と大きな声でしゃべってしまったので、あつという間にクラス全体に知れ渡ることになりました。そして、自分にはいつ届くのかと楽しみに待っていました。今年はどうでしょうか。

このような地道な取り組みによって、「この先生は自分の良い面を見てくれる、自分に期待してくれている人なんだ」と、子どもたち一人ひとりが感じられるようになっていきます。

ちなみに、元々学校生活に対して前向きで、学力も高い子の方が反応は良く、いわゆる手のかかる子ほど一筋縄ではいきません。なぜなら、そういう子はこれまで何度も傷付いてきているからです。「どうせ今年も叱られてばかりなんだ。」と挫けてしまっている心を立ち直らせるのは、容易ではありません。百日かける覚悟で取り組みを続けましょう。

## 真剣にふたつみる

最後に、もしかしたら一番大切にしていくかもしれないことを書きます。それは「ユーマア」です。一日に何度も、子どもと一緒に笑う機会をつくるのです。

例えば私の場合、メガネを上下逆さまにかけたまま大真面目な顔で教室へ入っていたり、わざと教室の前を通り過ぎてからこっそり戻って前の扉から現れたり…ということをします。リアクション芸人の様に、身振り手振りは大げさにします。

四月は少し多めにします。すると、「この先生は面白い人だ」というイメージが定着し、大して面白いことをしたり言ったりしていなくても、子どもがよく笑うようになります。一緒に笑った数だけ、クラスが明るく、楽しい雰囲気になる気がします。

ちなみに私は元々こそ真面目で面白いことなんて言えない人間でしたし、大人相手なら今でもそうです。でも、子どもの前なら、努力してきたので、真剣にふざけることができます。誰かを傷つけないように配慮しつつ、今年もたくさん笑って過ごせるといいな、と思っています。